

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

銀行まだら模様 (二つの出来事から)

6月にA社をめくって起きた二つの出来事は、喜ぶべきことなのか、あるいは問題とすべきことなのか、理解に苦しむ出来事だった。個々の銀行の行動はそれなりに理解できなくもないが、全体としてみると「銀行は何を目指しているのか」判らない、そんな出来事だった。以下、概要を書いてみる。

6月中旬、取引銀行の一つUFJ銀行から「貴社への融資を債権回収会社へ譲渡したいので、了承して欲しい」との連絡が入った。当たり前ながら、「譲渡」という言葉にA社は驚いたが、その理由を聞いて何となく分かった。譲渡理由は東京三菱との合併だったのだ。統合後を睨んでだろう、10月迄に問題債権を少しでも減らしたいというのがUFJの言い分だった。

ご多分に漏れずバブル期に戦線を拡大したA社は過剰債務に苦しみ、数年前から取引銀行の返済条件の緩和、いわゆるリスクを要請してきた。従って、ここ数年は新規借入を起さず、損益と貸借の改善により債務削減に努力してきた。取引銀行は大手銀行3行、地域銀行2行の5行に及んでいるが、UFJはその中で最もシェアの少ない銀行であった。

私自身は、取引銀行でのA社の債務者区分は要管理先ではないかと推測していたが、今回のUFJの行動は、大手銀行の債務者区分は推測よりもっと厳しい(多分、要管理先以下)、要管理先以下の小口債権はドンドン処理してしまう、ことを思わせる行動だった。東京三菱と合併する前に身ぎれいしたいという特殊要因はあるにせよ、大手銀行との取引は注意する必要があると考えざるをえなかった。

危機感を抱いたA社は、ビジネスローンの積極販売で知られるM銀行にA社、及び関連のB社の決算書2期分を提出し審査を仰いだ。勿論、M銀行とは取引はない。又関連B社は、「実質同一債務者」ということで取引銀行からは融資対象とならないと通告されている会社である。だが、数日後出てきたM銀行の回答は驚くべきものだった。

A社に対しては「30百万円、5年、6%」、

関連B社に対しては「40百万円、5年、2.5%」という回答だった。M銀行は、他の銀行がサービサーに譲渡しようとしている法人に、何とグループも含め70百万円も融資をしようと云うのだ。A社は喜び安心したが、流石に実際の借入は少額に止めることにした。

このA社にとって「地獄と天国」と云っていいような出来事が1ヶ月の内に起こった。これをどう理解すればいいのだろうか。

M銀行の融資は所謂ビジネスローンであるが、専門的にはトランザクション・バンキングと呼ばれる。トランザクション・バンキングは、財務情報等の定量情報が全て、採算性重視、業種別貸出ポートフォリオ管理の下に貸倒を最小限に抑える、ことを特徴としている。これは推測だが、A社及びB社の業種がM銀行ビジネスローンのポートフォリオ内で余裕があり、しかもここ数年の財務改善がスコアリングアップに寄与したのではないだろうか。特にB社への優遇は、B社がA社と実質同一会社ということで殆ど借入できず借入債務がないことが逆に幸いしたものと思われる。加えて云えば、ビジネスローンでトップを独走したいというM銀行の強力な経営方針も背景にあるのかもしれない。

又、この二つの事実は、同一企業でも銀行によって全く違う扱いとなること、そして、過去に発生した融資は不良債権となっても、新規の融資は健全債権となることを示している。ましてやビジネスローンは一定の管理条件の下に実行される貸出なので、元々不良債権という概念すらないのかもしれない。延滞が発生したビジネスローンは、事務的に粛々と処理するだけなのかもしれない。ビジネスローンにかつての銀行取引を思い浮かべてはいけないのかもしれない。

依然として変わらない銀行、一方で変わり始めた銀行。外から見てみるとその辺がよく見えず、よく分からない。このまだら模様と云ってもいい銀行に資金調達を依存せざるを得ない中小企業は、しかしそのまだら模様には惑わされず、やるべきことをしっかりとやっていかなければならない。経済環境も金融環境も劇的に変化する時代にあつては、銀行も試行錯誤を重ねているのが自然だ。そうした銀行の動きに一喜一憂しても仕方ない。私はそんな風に思った。

Weekly Fax Report

《複製・転載等のご連絡下さい》

URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/

2005.7.9(第469号)

TEL.0438-53-6092 FAX.0438-53-6096

Email: smc_toyo@hi-ho.ne.jp